

スポーツと言語から学ぶグローバル「人財」育成¹⁾
——神田外語大学での取り組みとこれからの展望——

朴 ジ ョ ン ヨ ン

Learning from Sports and Languages for
the Development of Global Human
Resources: KUIS's Approach
and our Future Outlook

Jeongyong PARK

In Japan, international sports events such as the upcoming Rugby World Cup in 2019, the Tokyo Olympics and Paralympic Games in 2020 will be held one after another. It is believed that in such events, volunteer interpreters can assist smooth communication between participants including the organizers, team members, and/or tourists coming from abroad. To meet this need, a series of volunteer training seminars have been held since 2007 under the sponsorship of Kanda University of International Studies (KUIS) and later the Consortium of Foreign Studies in Japan. In this article, I will first explain the goal and characteristics of those seminars as well as a survey conducted with 1,311 students who participated in the seminars. The findings of the survey suggest that with a clear goal and understanding of their responsibilities in the events, the students not only became more motivated to pursue a higher level of proficiency in foreign languages but also more conscious about their own position in the Japanese society. Finally this KUIS approach of teaching and learning foreign languages is further discussed in order to gain insights for the development of global human resources in Japan.

キーワード：東京2020オリンピック・パラリンピック大会、通訳ボランティア、異文化理解、グローバル人財育成、ホスピタリティマインド

1. 背景

近年、日本を含む世界においてグローバル化が加速し、益々国際競争が激しくなっている中、語学力が人財育成における重要な要素となってきた。日本国内の企業の中でも、英語を社内共公用語化する動きも活発化されており、特に海外進出を目指す企業には、外国語が駆使できる人財を積極的に採用し、社内でも英語でコミュニケーションを行うことを奨励している企業が多く現れている。

また、日本全国において、2019年にラグビーワールドカップ大会、2020年には東京オリンピック・パラリンピック大会を控え、大会に向けた事前合宿・キャンプ等競技力の向上や強化のために日本を訪れる選手や外国人数は年々増える一方である。

ラグビーワールドカップや東京オリンピック・パラリンピック開催運営にあたり、大会を支える通訳ボランティアは大会の成功に重要な存在である。しかしながら、国際スポーツ大会の主催側のボランティアのニーズに対し、その役割を担う人財が不足していることは大きな課題である。

特に外国語を駆使し、且つおもてなし(親切ない思いやり)の心を持った通訳ボランティアの必要性が益々高まってくることは言うまでもない。日本の国際的なスポーツイベントにおいて、公式的にボランティアが募集されたのは1985年のユニバーシアード神戸大会である。今給黎(1987)は、「2,000人の通訳ボランティアを公募したところ5,000人の応募があった」と述べており、通訳ボランティアの需要と供給の高さが窺える。また、その後、1998年の長野冬季五輪は32,579人のボランティアが参加し、最もボランティアが脚光を浴びた大会となり、大会運営を支えるボランティアの存在意義が実感された大会として報告されている。

こうした背景で、スポーツの国際化・グローバル化は必然であり、2020年の東京オリンピック・パラリンピック大会に向けて国際スポーツ大会開催運営に必要なボランティアの存在は必要不可欠である。

2. 研究の目的

本稿では、これまでの神田外語大学体育・スポーツセンターで開催した

スポーツ通訳ボランティアの実態と成果から、全国外大連携通訳ボランティア育成セミナーに参加した学生を対象に参加した動機、参加後の意識変化等を明らかにし、この取り組みにおける教育成果と21世紀に求められるグローバル人財育成の可能性について提言したい。

3. 調査方法

2007年から2017年まで進めてきた神田外語大学のスポーツ通訳ボランティアに参加した学生の参加動機と活動後の意識変化等の調査(朴, 2011)をベースに、2015年8月より全国外大連携通訳ボランティア育成セミナーに参加した延べ1,311名に対し、アンケート調査を行った結果をまとめる。

4. 日本社会におけるグローバル化とグローバル人財育成の必要性

近年、グローバル化が急速に進む中、21世紀の大学に求められる教育の方針と方向性が大きく変化し続けている。政府のグローバル人材育成推進会議によると、「グローバル人材の要素は、語学・コミュニケーション能力、主体性、積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感、使命感、異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティー等」といった要素を持ち合わせる人材をいかに育てるかにあるという。

また、日本学術会議(2010)によれば、21世紀の大学教養教育に必要な要素として、第1に既存の授業やゼミ等から培われる学問知、第2にパソコンやIT、様々な非言語コミュニケーション等による技法知、そして第3に、インプットされた知識をより実践的に駆使することによって養われる実践知が教育の取り組みに求められているという。

曾根原(2011)は、2010年から2年間「グローバル人事研究会」を開催し、役員及び人事担当者らとの議論を経て、まず、第1にグローバル人材が圧倒的に不足していること、第2にグローバル人事戦略があいまいなこと、第3に人事課題の複雑性を挙げている。つまり、海外の進出を目指し、歴史が長い企業でさえも、グローバルな環境で活躍できる人財が足りないのが現状である。また、優秀な人財の確保についても明確なグローバル人事戦略があいまいなため、事業戦略の中途半端さに繋がっていると指摘し

ている。さらに経営人も人事担当者も日本と異なる文化や習慣・価値観等の違いからくる様々な課題に直面し、ノウハウ不足で対応が手遅れになり、意思決定さえできず、現地採用自体の総合的な見直しを迫られていることが現状であると述べている。

このような状況において、「海外派遣管理者の業務実態」のインタビュー調査(日本能率協会、2008)では、グローバル環境で活躍できる人材像について以下のポイントを指摘している。

表1 グローバル環境で活躍できる人材像の5つのポイント

1	プラス思考・誠実さ・打たれ強さなどの精神性
2	マネジメントの基本能力と自分なりの専門性・高度なスキル
3	語学力も含めたコミュニケーション力・対人関係能力
4	多様な人材を巻き込み、鼓舞するリーダーシップ
5	異文化・赴任国理解と受容、そして日本と自己の理解

(日本能率協会、2008)

神田外語大学に関しては、経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援事業(2016)の中で、神田外語大学の建学理念、教育目的、特色等を踏まえ、グローバル社会に求められる要素について以下のように示されている。

「高度の外国語(地域言語及び英語)運用能力を有し、我が国の伝統と文化を究明し、諸外国の文化を理解し、国際社会の一員として世界平和に貢献し得る、幅広くかつ能動的コミュニケーション力を備えた自立した真の国際人」

そして、学生が卒業するまでに真の国際人として身に付けるべき具体的な資質・能力を、以下の表2の通り示している。

先の表1の企業や社会から求められるグローバル人材の資質と表2で示している神田外語大学の人財育成への要素で共通しているのは、人間とし

表2 真の国際人として身に付けるべき具体的な資質・能力

1	本学の外国語力スタンダードを満たす、高度の外国語運用能力
2	自己の意見を適切に表現できるコミュニケーション能力
3	他国の伝統・文化を尊重する世界観・歴史観、及び自国の伝統に基づく深い文化観
4	探求心にあふれ、新しい価値観を創造し得る幅広い教養
5	冷静に将来を洞察する力
6	自立的、主体的、能動的に行動できる力
7	たくましさや品格を備え、さらに人の心の痛みを思う豊かな心

(経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援、2016)

でのキャパシティーを重要視し、人文・社会・自然科学等の分野を超えた幅広い教養を求めている点である。

つまり、今後益々グローバル化していく日本の社会の中で、複雑かつ多様性の高い環境で様々な人種と触れ合い、相手の価値観や文化を理解し、受け入れる広い視野を持つ人財こそ、より良い人間関係を構築することができると考えられているのである。

5. 国際スポーツ大会の規模と通訳ボランティアの重要性

グローバル化と同様にスポーツ分野においても組織・多様化が進む中、アスリート・プレイヤーとしての「する」スポーツに限らず、大会やクラブ・団体・連盟、大会やイベント運営等「ささえる」スポーツボランティア活動が新たなスポーツ享受の在り方として確立されつつある。

下記の表3は時系列に大きな国際スポーツ大会に関わったボランティア人数を表したものであり、大会の円滑な運営にボランティアは極めて重要な存在であることが言える。

表3 国際スポーツ大会のボランティア規模

	大会名	開催年	ボランティア数(人)
1	ユニバーシアード神戸大会	1985	約 8,300
2	広島アジア大会	1994	約 10,000
3	ユニバーシアード福岡	1995	約 12,500
4	長野冬季五輪大会	1998	32,579
5	シドニー夏季五輪大会	2000	約 46,000
6	北京夏季五輪大会	2008	約 100,000
7	ロンドン夏季五輪大会	2012	約 70,000

(山口(2004:23)より加筆・修正)

表3からわかるように、国際スポーツ大会ボランティアは、1998年長野冬季五輪大会の32,579人を皮切りに、2000年シドニー夏季五輪大会約46,000人、2008年北京五輪大会約100,000人、ロンドン五輪大会は約70,000人が参加し、大会の運営を支えてきた。

さらに、2016年のブラジル・リオ五輪大会は9万人規模のボランティアが参加しており、2020東京オリンピック・パラリンピック大会では約8万人規模のボランティアを募ることが予定されている。

このように国際大会におけるボランティアの需要と供給への関心・興味が高まっている一方、通訳ボランティアの資質と能力は必ずしも満足されているわけではない。野村(2002)は、国際スポーツ大会における通訳ボランティアの重要性と課題について、「海外の選手・役員は気軽にボランティアに声をかけてくれるのに対し、ボランティアたちの語学力の不足さの理由でコミュニケーションの障害が生じ、思うように伝えられない」(p. 301)ことを指摘している。

国際スポーツイベントにおいては、大会の円滑な運営のため、外国人選手・役員のニーズに対応できる通訳ボランティアを適所に送り出し、配置することが求められる。特に英語が国際共通語となっていることから、英語コミュニケーション能力に優れた通訳ボランティアのニーズは今後高

まってくるだろう。

6. 神田外語大学におけるスポーツ通訳ボランティア活動の実態

神田外語大学体育・スポーツセンターでは国際大会における通訳ボランティア経験を通じたグローバル人財育成を目指し、外大生の言語運用能力や語学学習意欲の向上を図る取り組みを2007年からこれまで進めてきた。

朴(2015)では、外国語を日常的に使用できる環境にない日本の学習者たちにとって、責任を伴う形で外国語を使う体験は、さらなる高度な言語能力獲得への大きな動機付け、学習意欲の向上に繋がっていると述べている。また、国際スポーツ大会を支える通訳ボランティア活動は大学教育の現場においても貴重な実践の場となっており、グローバル人財として求められる語学・コミュニケーション力、異文化理解力を深めるきっかけとなる。

6.1. スポーツ通訳ボランティア活動の目的

神田外語大学では、2007年に学生支援プログラムとしてスポーツ通訳ボランティア活動を発足させた。その目的は、「スポーツにおける国際大会・イベントの参加経験を通じ、言葉の運用実践経験や社会経験の積み重ねによって、より豊かな自らの人間性の獲得と社会に貢献できる人材を育成すること」である。

また、2013年から学内部署改編により、ボランティア活動の窓口として、ボランティアセンターが設立された。スポーツ通訳ボランティアプログラムは、体育・スポーツセンターからボランティアセンター内のスポーツ通訳ボランティア推進室へ移行され、学生に対する教育的な支援だけでなく、各種スポーツ競技団体の大会運営や事情に配慮し、開催地域や団体の要望も考慮した上で通訳ボランティアを送り出す体制となっている。

6.2. スポーツ通訳ボランティアの実績

以下の図1からわかるように、2007年発足当時は、通訳ボランティアの学内外での認知度が限られていたこともあり、参加した大会は5大会、参

図1 神田外語大学における年間の国際大会参加の実績

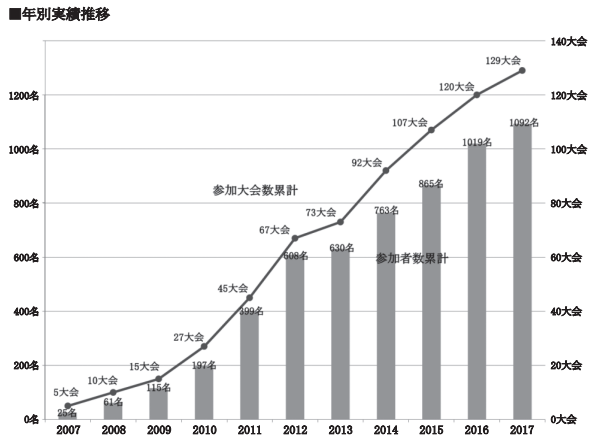
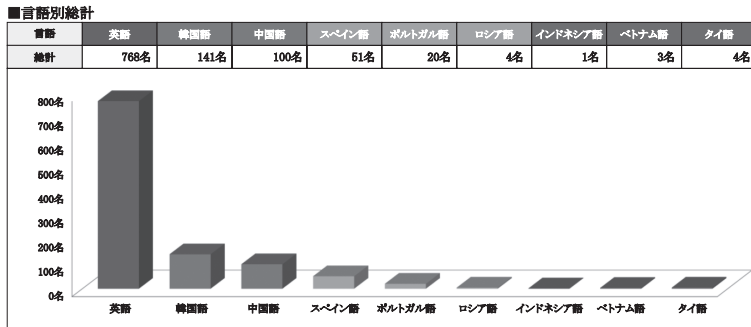


図2 神田外語大学のスポーツ通訳ボランティアの言語別参加人数



加者は20余名にすぎなかった。しかし、認知度が高くなるにつれ、参加大会、参加者数ともに大幅に増加し、2011年以降は参加大会20大会以上、参加者数200名超と大きく増加しており、2017年8月までに累計で1,092名を送り出した。

図2の通訳対象の言語別では、英語が768名と最も多くを占めており、韓国語141名、中国語100名の順となっている。その他言語としてはスベ

イン語が 51 名、ポルトガル語 20 名で、続いてロシア語 4 名、インドネシア語 1 名、ベトナム語 3 名、タイ語 4 名の学生が活動している。

このように、国際スポーツ大会の主催側からのニーズとしては英語が最も多く、その他英語を母国語としないアジア・南米・ヨーロッパの国々の言語等、大会規模や種類によって多岐に亘っている。これに対応して、本プログラムでは英語のみならず幅広い教養教育にも力を入れており、多言語への対応も行っていることが特色である。英語が圧倒的に多くを占めていることに関し、母語が英語でなくても英語ができる選手・役員は多く、英語が国際語であること、英語ネイティブの英語だけが英語ではないことがスポーツ通訳ボランティア活動から実感できる。

また、このプログラムを発足させた 2007 年以降、通訳ボランティアの参加大会と参加者の数が増加していることについては、次の 3 点が要因として挙げられる。

1 点目は、2020 東京オリンピック・パラリンピック大会に向けた日本開催の国際大会の増加である。日本は安全でトレーニングの環境が充実していることから外国人選手団からのニーズも高まっている。さらに、スポーツ競技団体と地域活性化を図る各地域の団体によって、積極的な国際大会の招致活動が展開されている。また、各種競技の観点からは、世界トップレベルの選手たちと競争することが、日本人選手の競技力向上に繋がるという期待もある。

2 点目は、スポーツ通訳ボランティア活動の魅力が伝わり、興味を持ち志願する学生が増えてきたことである。通訳ボランティア活動は、外国語を学ぶ学生にとっては日頃授業でインプットされた語学知識とスキルを試すチャンスであり、国際スポーツ大会の運営や選手団の大会期間中の世話役を通じた語学力とコミュニケーション力の向上が期待できる。

最後の 3 点目としては、世界から来日するトップアスリートとの身近な交流が実現されることである。このような交流を通じて、異文化理解とスポーツの機能を改めて感じることも、学生たちには興味深く魅力的な活動になっていると言える。

6.3. 「スポーツ通訳ボランティア」プログラムの内容

スポーツ通訳ボランティアの教育プロセスとしては、次の5つの要素が含まれている。第1に学生たちは基本学習として全国外大連携通訳ボランティア育成セミナーを受講し、スポーツを文化としてとらえ、スポーツを取り巻く幅広い環境を理解し、国際スポーツ大会のメカニズム、および通訳ボランティアの基礎的な知識とスキルを理論的に学ぶ。第2に主催団体の関係者による事前説明会に参加し、通訳ボランティアとしての役割や活動内容、注意点等について学ぶ。第3に実習として、ボランティア通訳に参加する。つまり、学生たちは①と②のセミナーや事前研修で学んだ知識を単なる知識として学ぶだけではなく、その応用・実践活動にも参加していく。また、教室でインプットされた知識・スキルをアウトプットし、外国人選手団と主催側との間に積極的に関わることによって、語学力・コミュニケーション力を高める。第4と第5は③のボランティア経験が学生個人々人の人間形成に繋がるようなフォローアップの役割を持ち、参加学生は事後報告と自己評価としてのレポートと課題を提出し、活動内容を振り返る。

こうした一連のプロセスを通し、学生の通訳ボランティアの経験は、単に語学学習への動機付けやモチベーション向上などにとどまらず、グローバル人財へと成長するために役立つプロセスとして設定されており、後述べる学生のアンケート調査からもそうした成果が見て取れる。

6.4. スポーツ通訳ボランティアの主な業務

表4(次ページ)はこれまで神田外語大学の通訳ボランティア学生による事後意識調査を行った結果から、実際にどのような業務を担当したかをまとめたものである。

通訳ボランティア活動は大会規模や各競技種目等によって大きく異なる。大会開催前から終了まで、来日する多くの外国人選手団の対応を中心に、大会の受付をはじめ滞在期間中に行う活動は多岐に亘っている。また、業務の種類によって求められる語学・コミュニケーション力のレベルがかなり異なることから業務場所に相応しい通訳ボランティアを配置させ

表4 スポーツ通訳ボランティアの主な業務と内容

	主な業務	内容
1	大会受付（選手団・大会関係者）	大会会場及び場内においてAD（Accreditation）カードの受け渡しや入場案内・誘導
2	事務局と役員・選手の間で情報連絡役	選手団からの要望や情報を受け大会運営部署に速やかに報告及び連絡
3	海外選手団の大会期間中の世話（スケジュール管理）	担当するチームの食事・練習・試合時間・場所等の確認等、怪我人の場合の対応
4	観光スポット案内	練習及び試合がない日は日本の観光スポット案内と手配
5	開会式・監督・スタッフ会議の通訳	大会期間中の開閉会式のアナウンスをはじめ監督・レフリーの会議及び打合せ

ることが大会運営を円滑に進める上で重要となる。参加する学生たちの単純にテストなどで測る「言語力」以上の柔軟な現場対応力、選手他のニーズを察知する配慮、ホスピタリティ精神、異文化理解力なども、「通訳ボランティアの質と能力」には関係していると思われる、そうした観点から応募人数が多い場合はインタビューやこれまでの活動等から総合的に判断し、選考している。

6.5. スポーツ通訳ボランティアから期待される効果

これまで参加した学生のアンケート調査結果から、授業やセミナー等でインプットされた知識とスキルを活かし、普段の授業では身に付けられない効果が期待できる。

表5に示すように、参加者たちは学んでいる外国語を実践的に駆使することにより、相手とのコミュニケーションの重要性や外国人と主催側との間の仲介、客観的な語学力について知ることになる。また、様々な外国人と触れ合うことによってみえる日本人としての考え方と価値観の違いを理解することができ、アイデンティティーについての理解を深めていること

表5 スポーツ通訳ボランティアから期待される効果

学習領域	
1	言語運用能力とコミュニケーション力の向上
2	積極性、主体性、協調性
3	様々な国の人との交流を通じた異文化理解力
4	日本人としてのアイデンティティーの再考
キャリア領域	
5	グローバル視点の向上
6	日本を代表とするアスリートとの交流と人間力の理解
7	次のステップアップ(インターン・海外留学)
8	キャリア形成(就職活動に繋げる)

が推察できる。

キャリア領域についても、世界から来日する選手団やメディア関係者等と同じ環境に身を置くことによってみえるグローバルな思考力の向上に繋がる効用が期待できる。さらに、トップアスリートと身近に交流することによって、大会に臨むためにこれまで歩んできたアスリートならではの人生観やチャレンジ精神を理解することになり、新たな目標に向けて努力する動機付けになることが期待できる。

6.6. スポーツ通訳ボランティア参加後の教育的成果

表6はこれまで国際スポーツ大会に通訳ボランティアとして参加した学生(600余名)に対し、アンケート調査を行った結果をもとに作成したものである。

この調査結果から言えるのは、世界の国々から来日した外国人選手団への支援として異文化交流や通訳(コミュニケーション)業務を遂行することで、語学学習へのモチベーションが向上する効用があるということである。つまり、普段の授業や生活だけでは体験できない場所や条件の下で、

表6 スポーツ通訳ボランティアの教育的な効果(朴, 2011)

NO	効果要因	学生の記述からの考察
1	語学力とコミュニケーション力アップ	授業で学んだ語学の知識・スキルを世界から来日した選手たちとの交流を行うことにより、客観的な語学力を知ることはもちろん必要なコミュニケーション方法について学んでいる
2	異文化理解	外国人選手のお世話やサポート業務を行うことによって文化の違いや異なる価値観の理解が深まることが明らかになった
3	通訳経験	異なる選手と主催側の間で言語を訳す経験することによって母国語の重要性や言い回し等表現力が身に付いている
4	積極性・主体性	大会関係者から必要とされ、選手団側と積極的にコミュニケーションをとることの重要性について改めて感じている
5	自己発見	海外選手団のお世話や大会運営サポート業務を遂行し、今まで気づいていない新たな自分の姿を見つけることができる
6	自己実現	大会を成功させ、語学を学ぶ意義や必要性を実感していることや普段会えないトップアスリートと身近な交流によって満足していることが明らかになった

授業中に学んだ語学力を試す機会を多く持ち、異文化の理解を体験し、語学の知識やスキルを実践することにより、外国語を学ぶ意義や必要性を感じていることがわかる。中田(2009)が「語学・技術は駆使すればするほど向上し、向上した能力・技術が社会貢献度を増幅させ、そのことがまた能力・技術の向上意欲へつながる」と述べているように、この通訳ボランティア活動もまた、学生たちのグローバルマインドの向上や活動から得られた自己に対する成果と課題を改善し、次にステップアップしていくモチベーションアップに繋がっていると考えられる。

7. 全国外大連携通訳ボランティア育成セミナーの実態

7.1. セミナー開催の経緯と実績

第6章で記述した通り、これまでの社会的なニーズと課題に対して、2015年8月に全国7つの外国語大学(関西外国語大学、神田外語大学、京都外国語大学、神戸市外国語大学、東京外国語大学、長崎外国語大学、名古屋外国語大学)の学生を対象とした第1回全国外大連携通訳ボランティア育成セミナーを開催した。本セミナーを開催した経緯は以下の通りである。

- 1) 東京2020年7月に向けて国内外で開催される国際スポーツイベント等の増加に伴い、学生通訳ボランティアに対するニーズが上昇
- 2) 外国語を学ぶ学生による通訳ボランティア活動の教育的意義、及び国際社会への貢献度の高さについて、過去10年に亘る取り組み等により確信
- 3) 語学力やコミュニケーション能力を活かしたボランティア活動を通して、グローバル人材育成や外大生の魅力を広く社会に発信し得る好機の到来

上記の1)～3)までの経緯を踏まえ、神田外語大学が幹事校として、2015年8月より第1回全国外大連携通訳ボランティア育成セミナーが開催された。表7は第1回～5回までのそれぞれの大学別参加者の推移である。

表7にまとめられたように、第1回～第5回目まで1,334名の外大生が参加している。第1回と第2回の募集定員は各回240名だったのに対し、事前申し込み者数が1,232名となり、本セミナーへの参加意欲が非常に高いことが明らかになった。第1回と第2回まで参加した各大学の人数は神田外語大学239名で参加者が最も多く、関西外国語大学51名、京都外国語大学48名、名古屋外国語大学41名、長崎外国語大学34名、神戸市外国語大学13名、東京外国語大学が7名の順であった。次に、第3回目は募集言語を英語だけに限定せず、その他韓国語、中国語、スペイン語、ポルトガル語の5カ国語を加え、400名を募集したのに対し、808名に上る学生が仮申し込みを行った。しかしながら、第3回と第4回目のセミナーの

スポーツと言語から学ぶグローバル「人財」育成

東京外国語大学の学生らは0名となっており、大学からの学内への周知・広報方法等によって学生の参加率のばらつきがあることが課題となった。

セミナーに参加した学生は、「全国外大連携通訳ボランティア人材バンク」

表7 全国外大連携通訳ボランティア育成セミナー受講者推移

大学名	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	各大学 総受講 者数
関西外国語大学	27	24	29	46	34	160
神田外語大学	119	120	220	17	221	697
京都外国語大学	27	21	54	60	55	217
神戸市外国語大学	9	4	5	8	0	26
東京外国語大学	6	1	0	0	4	11
長崎外国語大学	21	13	29	11	22	96
名古屋外国語大学	27	14	30	36	20	127
回毎の受講者数	236	197	367	178	356	1334
受講者数推移(延べ数)	236	433	800	978	1334	

表8 大学別人材バンク登録数の推移

大学名	第1回	第2回	第3回	第4回	第5回	各大学 総登録 者数
関西外国語大学	27	24	29	39	33	152
神田外語大学	106	111	204	4	159	584
京都外国語大学	27	21	53	47	49	197
神戸市外国語大学	9	4	5	6	0	24
東京外国語大学	4	1	0	0	4	9
長崎外国語大学	20	13	25	6	18	82
名古屋外国語大学	26	14	30	24	19	113
回毎の受講者数	219	188	346	126	282	1161
登録者数推移(延べ数)	219	407	753	879	1161	

に登録できる。このバンクに登録すると、修了後にも国際スポーツ大会について情報が随時届くようになっている。上記の表8をみると、第1回～第5回目までの受講者1,334名に対し、1,161名の学生がこのバンクに登録しており、87%の割合を占めている。この結果は、受講者たちがセミナーで培われた知識だけでなく、今後国際大会において、ボランティアとして参加していく高い意欲を持っていることの現れだと言える。

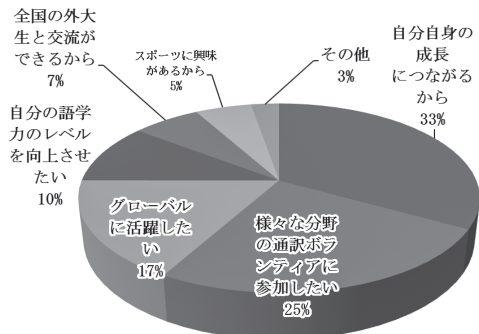
7.2. 第1回から5回目までの受講者アンケート調査結果

第1回～5回目までの受講者1,334名に対し、アンケート調査を行った結果、以下の質問項目に対し、回答が得られた。

7.2.1. セミナーの参加動機 (n = 1334)

図3は、このセミナーに参加した動機についての結果である。最も多くの割合を占めているのは、「自分自身の成長につながる」で33%である。学生たちは授業外の普段体験できない環境の下、自己成長と新たな自己発見に繋がりたいと思っていることがわかった。次に多くを占めているのは、「様々な分野の通訳ボランティアに参加したい」25%、「グローバルに活躍したい」17%の順となっており、国際スポーツ大会に参加する外国人選手や大会運営に通訳ボランティアとして関わりたい意欲が現れていることが理解できる。

図3 第1回～5回目まで全国外大連携通訳ボランティア育成セミナーに参加した動機



7.2.2. 参加後の意識変化等について (n = 1334)

ここからはセミナーに参加した学生の意識の変化等について紹介する。アンケートの結果、以下の(1)から(8)のような意識変化があったことが挙げられた。

(1) グローバル人材とは何か、そのために何をすべきかが明確になった

図4 回答結果(1)

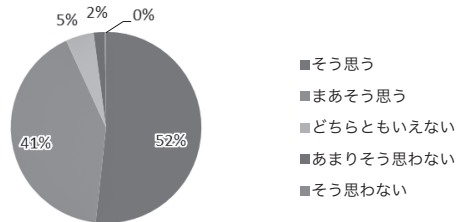
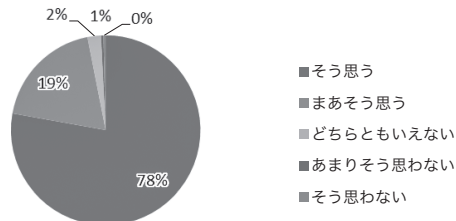


図4からわかるように、「グローバル人材とは何か、そのために何をすべきかが明確になった」という項目について、52%が「そう思う」と答えた。41%の「まあそう思う」という回答と合わせると、93%を占める参加者たちが単に通訳ボランティアのスキルや技法だけを学ぶのではなく、グローバルなマインドやグローバル人材になるための資質と条件等について理解を深めていることが明らかになった。

(2) 語学力とコミュニケーション力の必要性について学ぶことができた

図5 回答結果(2)



次に、図5の「語学力とコミュニケーション力の必要性について学ぶことができた」という項目に対しては、「そう思う」78%、「まあそう思う」

という答えが19%を占めていた。グローバル人材になるための条件である語学力・コミュニケーション力の必要性を感じている受講生が97%を占めていることから、外国語を学ぶ学生が語学を学ぶ意義とコミュニケーション力の重要性を実感していたことが明らかになった。

(3) スポーツを取り巻く多様な分野や専門知識の理解が深まった

図6 回答結果(3)

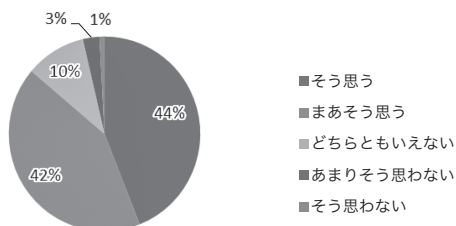


図6の「スポーツを取り巻く多様な分野や専門知識の理解が深まった」に対する回答は、「そう思う」44%、「まあそう思う」42%で、合わせて86%となった。一方で、「どちらともいえないが」10%を占めている。つまり、このセミナーは受講生にとって、スポーツ分野の専門知識を学ぶよりも幅広い分野の知識を理解する場となっていたと推察できる。

(4) 参加する前より語学を学ぶ意義と学習意欲が高まった

図7 回答結果(4)

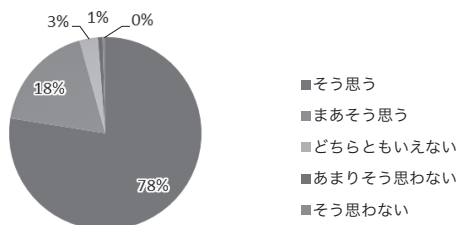


図7の「参加する前より語学を学ぶ意義と学習意欲が高まった」という項目に対しては、「そう思う」78%、「まあそう思う」18%の順となっており、参加前と受講後の語学学習に対する意識の変化があったと感じた受講

スポーツと言語から学ぶグローバル「人財」育成

生が96%を占めている。この結果から、語学学習を主に目的とする外大生にとって、セミナーへの参加は、語学を学ぶ意義とさらなる学習へのモチベーション向上に役立つということが浮き彫りとなった。

- (5) 今後、通訳ボランティア実践や様々な活動に今より積極的にチャレンジしてみたい

図8 回答結果(5)

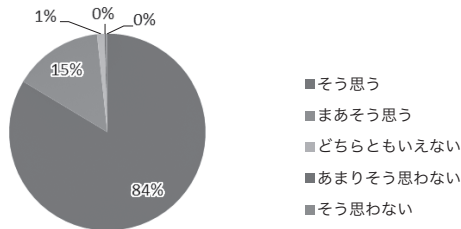
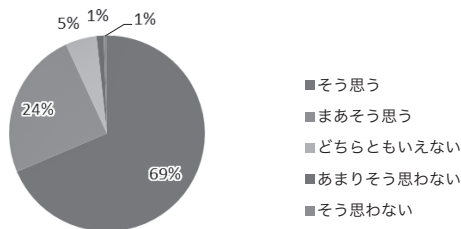


図8の「今後、通訳ボランティア実践や様々な活動に今より積極的にチャレンジしてみたい」に対しては、「そう思う」が84%、「まあそう思う」が15%を占めており、99%の受講者は座学のセミナーだけで満足せず、次の通訳ボランティア実習に積極的にチャレンジする意識に変わったことが明らかになった。

- (6) 受講前よりスポーツを通じて異文化・国際交流に興味を湧いた

図9 回答結果(6)

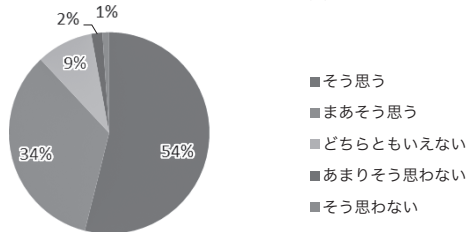


次に図9の「受講前よりスポーツを通じて異文化・国際交流に興味を湧いた」に対する回答は、「そう思う」69%、「まあそう思う」24%、「どちらともいえない」5%の順となった。受講生は、セミナー中に国際スポーツ

大会で通訳ボランティアに参加した学生の体験談等を聞く機会がある。図9の結果では、こうした体験談によって、受講生が外国人選手や大会運営に関わることでみえてくる異文化理解やスポーツを通じた国際理解を深めたことが顕著に現れている。

(7) 日本人としてのアイデンティティーについて考えるようになった

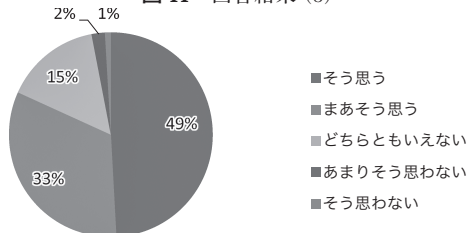
図10 回答結果(7)



次に、図10「日本人としてのアイデンティティーについて考えるようになった」に対しては、「そう思う」54%、「まあそう思う」34%、「どちらともいえない」9%の順となった。このことから、日本文化や価値観に対する理解は、座学以外に、通訳ボランティア実習を通じて様々な外国人と交流し、日本を見つめなおす機会を与えられることによって深められ、さらにそれが日本人としてのアイデンティティーを考えることに繋がっていると考えられる。

(8) 自分の興味・関心がある分野に気づき、新たな自分を発見した

図11 回答結果(8)



最後に、図11の「自分の興味・関心がある分野に気づき、新たな自分を

発見した」に対する回答は、「そう思う」49%、「まあそう思う」33%、「どちらともいえない」15%の順となった。この結果から、学生たちがセミナーを通して、普段の授業で学ぶこと以外の様々な分野への理解を深め、新たな自分への興味・関心分野に気付いていることが感じとれる。一方、15%を占めている「どちらともいえない」と言う学生たちに関しては、気付きを促す必要性があると考えられる。次回のセミナーでは、こうした学生に対し、積極的に実習に参加する機会を与えることが求められる。

8. まとめ

日本では今後、2019年のラグビーワールドカップ大会、2020年の東京オリンピック・パラリンピック大会、2021年のワールドマスターズゲームズ等目まぐるしい国際スポーツ大会を控えている。筆者はスポーツにおける国際大会の通訳ボランティア経験を通じ、グローバル人材として求められている語学力やコミュニケーション力を向上させ、より豊かな人間性の醸成と社会に貢献できる人材を輩出することが日本社会及びスポーツ普及・振興にとっても大いに意義があるものだと考えている。

本稿で紹介した「スポーツ通訳ボランティア」プログラムの活動に参加した学生に対する調査から、外国語を学ぶ学生たちにとって教室や英語学習カリキュラムとは異なる形で、実践的にコミュニケーションを行うことは、異文化理解を深めるとともに、自らの社会における位置づけを考える機会になっていることがわかった。また、日常的に外国語を使用できる環境にない日本の学習者たちにとって、責任を伴う形で外国語を駆使することの難しさを実感することは、さらに高度な言語能力への動機付けとさらなる学習意欲の向上に繋がること明らかになった。

神田外語大学のこの取り組みの実績と成果をベースに全国外大連携通訳ボランティア育成セミナーを企画開催することは、学生たちが他人と協調性を保ちながら働くことの大切さと喜びを体得し、学習意欲の向上とともに新たな自己発見をすることに繋がる。また、ボランティア実習に参加するうちに、学生たちは語学力の不安を抱えつつも、国内で開催される大会にとどまらず海外で開催される大会にも目を向けるようになり、積極的に

チャレンジをする。

2018年2月にはこのセミナーの受講生102名が韓国で開催される平昌オリンピック・パラリンピック大会に通訳ボランティアとして参加することになっている。これまでの実習よりもさらに厳しい海外での通訳ボランティア活動の経験は人生の中で二度とない機会であり、言葉に表せない経験を得ることに違いない。今後、益々スポーツのグローバル化・国際化は加速するであろう。日本のスポーツと言語教育分野において貴重な実践経験の場が確保され、このプログラムの教育的な意義やその効果が日本のグローバル人材育成へ繋がっていくことを期待したい。

注

- 1) 「人材」に関して本稿では、人をより価値のある存在であることを意識し、引用部分以外は「人材」を使用している。

参考文献

- 今給黎久(1987)『株式会社神戸市はいま』オーエス出版
- 神田外語大学(2016)『経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援』平成24年文部科学省採択事業
- グローバル人材育成推進会議(2011)『グローバル人材育成推進会議 中間まとめ』経済産業省
- 曾根原幹人(2011)「当面する企業経営課題に関する調査」『人間会議：多様性の中で活躍できる人づくり3つのポイント』132-134頁
- 中田和子(2009)「ボランティアにおける「利己性」と「利他性」：語学ボランティアのケーススタディを通して」『松本大学地域総合研究』9号、109-123頁
- 日本学術会議(2010)『日本の展望：学術からの提言2010』17-18頁
- 野村一路(2002)「障害者スポーツにおけるボランティア」『体育の科学』52巻、4号、299-301頁
- 朴ジョンヨン(2011)『国際スポーツにおけるスポーツ通訳ボランティアの成果と課題：神田外語大学の試みと成果を中心にして』筑波大学大学院人間総合科学研究科修士学位論文
- 朴ジョンヨン(2015)「国際スポーツ大会における通訳ボランティア経験と言語運用能力」長谷川信子編『日本の英語教育の今、そして、これから』開拓社、253-264頁